九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 真西山の思想について

真鍋, 正昭
九州大学大学院

https://doi.org/10.15017/18096

出版情報：中国哲学論集. 12, pp.35-47, 1986-10-01. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

# 真西山の思想について

真鍋正昭

## はじめに

李二曲は『四書反身録』の冒頭に次のように言う。

「大学は孔門授受の教典、全体大用の成規なり。両程表章し、朱子闡繹し、真文忠公之を前に衍し、丘文荘公之を後に補ふ。其の全体大用の実に於て発明して余蘊無し。」(巻一)

宋初に芽生えた全体大用の考え方は朱子に至って完成され、その後この思想によって様々の業績が生み出されることになる。朱子は、先ず『大学』を読んで規模を定める、と言ったが、実に『大学』こそ全体大用に堪え得る規模を持っていた。そしてこの補伝に初めて「我が心の全体大用、明らかならざる無し」との宣言が唱えられるのである。真西山(一一七八―一二三五)も『大学』を基にして全体大用思想を展開した。『大学衍義』である(1)。彼は『大学』を君主の学問・政治の書として敷衍させていった。

「治を願ふの君、儻し其の書(大学)を取り、玩びて之を繹ぬれば、則ち凡そ帝王治を為すの序、学を為すの本、胸次に洞然たり。臣不佞、窃かに是の書を羽翼する所以の者を思ふ。」(大学衍義序)

ところが『大学衍義』では所謂八条目のうち治国・平天下が欠けていて、斉家までしか著されていない。そして西山は「(格物致知・誠意正心・修身・斉家の)四者の道得れば、則ち治国・平天下は其の中に在り」(同)、「夫れ修己に安人の効有り、明徳に新民の功有り」(西山先生真文忠公文集三二、問大学君徳治效、以下、西山文集と略称)と述べ、全体が立てば大用はそこに自ら実現されるとしている(2)。後に明の丘瓊山は『大学衍義補』を著し、『大学衍義』の後を

受けて治国・平天下を説いたが、両書は「前書（衍義）は理を主として身家の外に出でず。故に其の衍ずる所の義、大にして簡なり。臣の此の書（衍義補）は事を主として以て天下の大を包むこと有り。故に衍ずる所の義、細にして詳なり。其の簡、其の詳、各々惟だ其れ宜し。若し二書を合はせて之を言はば、前書は其の体、此の書は其の用なり」（大学衍義補を進呈する題、周洪謨）と考えられた。但し西山は「其の所謂格物・致知・誠意・正心・修身は体なり。其の所謂斉家・治国・平天下は用なり。人主の学必ず此を以て拠依と為し、然る後体用の全以て黙識すべし」（西山文集一三、召除戸書内引箚子四）とも述べていて、『大学衍義』も大用に及んでいると言えなくもないが、しかしながら、大用は斉家に止まるものでなくむしろ治国・平天下にこそあるのだから、彼は体に重きを置き、そこに用を期待したと考えることができよう(3)。では全体大用の思想家として体に重きを置いた西山の特徴をみていきたい。

## 一

西山は詹元善の門人であって朱子の再伝にあたる。そして朱子の体用思想が元善を通して西山にも受け継がれることになる(4)。彼の体用論を聞いてみると、全体とは「性の本体渾然全備、仁義礼智信是れなり」、大用とは「性の発用し出で来たる者、惻隠羞悪辞遜是非是れなり」（西山文集三〇、問全体・問大用）。また、「大抵理と事と元より二物に非ず。異端は理を言ひて事に及ばず、其の弊用無しと為る。俗吏は事を言ひて理に及ばず、其の弊本無しと為る。惟だ聖賢の学のみ則ち理を以て事の本と為し、事を理の用と為し、二者相須ちて本より二致無し。此れ弊無しと為す所以なり。」（西山文集一八、経筵講義）更に、儒者の学には性命道徳の学と古今世変の学と二つあるが、両者は一致する。天命の性や仁義は理であり、王季文王の述作から武王周公の達孝に及ぶまで、また井田学校の政と三王五霸の功罪とは用である。理を言って用に及ばないのも、用を言って理に及ばないのも道の大全とは為し得ない。経を本として史を参じ、理を明らかにしてこれを用に達するのが善学者である（西山文集二八、周敬浦晋評序）、とも言う。彼の儒学者としての立場を示すものである。伊川より朱子へと伝わる宋代理学では理気の厳然たる峻別を一つの柱とした。理気相即とはいうものの、「気強くして理弱し」（朱子語類四）と嘆じた朱子は、理と気を葛藤するものとして考える傾向

が強かった。ともすれば気に圧到されてしまいがちな理の顕彰という目的が、朱子の功夫を貫いていたのである。そして理とは何より世界を形づくるべき天理であった。ところが西山は朱子に比べ体用、理気をより相即的に見る傾向が強いようである。

「熙然として春物、其の主を得ざる者無く、凛然として秋物、其の成を遂げざる者無し。是れ果たして孰か之を為すや。曰く陰と陽とのみ。人、天道の妙の是の如きを知りて、吾の仁義と謂ふ所以の者即ち天の陰陽なるを知らざるなり。」(西山文集二八、送陳端父宰武義序)

彼は理気の相即調和の面に目をつけていった。

「理は内より出でて事に周く、事は外より来たりて理に応ず。理は即ち事なり。事は即ち理なり。」(読書記二)

そこで西山は理を説くよりむしろ中や義を説くことが多い。

「按ずるに堯舜禹湯数聖相伝ふるは惟だ一の中の道のみ。中とは何ぞや。其の命、天地より出でて、民之を受けて以て生ずる者なり。其の理、事事物物の間に散じて、当然一定の則有らざる莫く、過ぐべからず、及ばざるべからず。是れ所謂中なり。……其の体は則ち天理の正を極む。是れ大中と名づく。其の用は則ち時措の宜しきを酌す。是れ時中と名づく。」(大学衍義一一)

中とは理の姿を形容したものであるが(5)、理よりも幅を持っている。朱子の説く理は、あらかじめ指定されている定理という意味あいを強く持つのに対し、中は世界を造る基盤となると同時にあらゆる事物に柔軟に対応していく力を持つ。朱子は言う、「中は定体無く、時に随ひて在り。是れ乃ち平常の理なり」(中庸章句注、読書記一六に引用)と。大禹謨では道心と中とを直結して説いている。朱子は、道心が主となれば「動静云為自ら過不及の差無し」(中庸章句序)と言い、西山もこれを受けて、「理義常に存して物欲退聴す。之を以て万変に酬酌すれば、往くとして中に非ざる無し」(大学衍義二)と言う。中は心の功夫に即したものと考えられた。西山は朱子の中の説を受ける。即ち「不偏不倚、過不及無し」であり、「其の未発に方りては、未だ過不及無きの名づくべき有らずと雖も、而れども過不及無きの本体と為る所以は実に是に在り。其の発して中を得るに及ぶや、其の主る所、一事に偏らざること能はずと雖も、然れども其の過不及無き所以の者は、是れ乃ち偏倚無き者の為す所にして、一事の中に於ても亦た未だ嘗て偏倚する所有らず」

（中庸或問、読書記一六に引用）である。中は実に全体大用の構造にぴったりと当てはまるものであった。そして、

「天道の自然、人道の当然、過ぐべかず及ばざるべからざる者即ち中なり。」（読書記一六）

「（中は）天地自然の理にして、人之を得て以て生ずる者なり。是れ所謂天命の性なり。」（大学衍義五）

中とはあくまでも自然当然なものであり、人間本来の姿であった(6)。

又西山は、「中庸を知らんと欲せば権に如くは無し。権は須らく是れ時にして中と為すべし。……権の言為る秤錘の義なり。何物か権と為す。義なり」という伊川の語を至れりとし、易の道は時義を以て主と為す、と言う（大学衍義一一）。義も重んじられることとなる。義と利は常に対比されるものであるが、「義とは天理の公なり、利とは人欲の私なり。二者氷炭の相反するが如し。然れども義に一なれば則ち利自ら其の中に在り。蓋し義とは宜なり。利も亦た宜なり。苟も義を以て心と為さば則ち事宜しからざる無し」（西山文集三〇、問治国平天下章）となる。伊川の「義の安んずる処、便ち利を為す」（二程全書一七）を受けたものと思われるが(7)、義利は理気世界の調和からみれば結局一致するものであった。中といい義といい、儒学の理念である経世済民において現実に大きな力を発揮してくることは明らかである。更に、

「伊川先生云う、利は独り財利の利のみならず。凡そ一毫も自便の心有れば即ち是れ利、と。此の論尤も心術の微に補ひ有り。南軒先生又謂ふ、為にする所無くして為すは皆義なり。為にする所有りて為すは即ち利なり(8)、と。其の言愈々精にして且つ微なり。学者知らざるべからざるなり。」（西山文集三〇、問治国平天下章）

こうしていよいよ心の功夫に集約されてくることになる。以上の中や義への注目は西山の心を重んじる傾向を表わしているものと言えよう。

## 二

さて西山のこの傾向は、先の理気の調和の考え方からも導かれるところである。実際西山は性より心を説くことが多い。心経では既に「大禹謨」の堯舜禹の授受を心学と表現してさえいる(9)。西山には心を重んじる傾向があった。

「性情の徳具はると雖も、而れども発揮運用は則ち此の心に在るのみ。蓋し寂感を該ね、動静を貫く者は心なり。心其の正しきを得て、然る後性の本然なる者全く、情の発するも亦た節に中る。故に曰く、心は性情の徳に妙なり、と。」(読書記二)

決して性情を区別しないわけではない。心は性情を結ぶ、というときの心のはたらきが重視される。性と情との乖離こそ朱子の功夫の出発点であったが、西山は理気と同じく性情の調和を信じる傾向が強い。

「凡そ天下に有る所の理、一性の中に具はらざる莫し。……情とは性の動なり。……未だ発せざれば則ち理は性に具はり、既に発すれば則ち理は情に著る。」(読書記二)

発動時において情と理が一致する心とは道心である。『心経』の賛に言う、

「維れ此の道心、万善の主なり。天の我に与ふる、此れ其の大なる者なり。之を方寸に斂む、太極躬に在り。之を万事に散ず、其の用窮まらず。」(心経)

道心こそ実践主体の根本である。『大学衍義』の帝王為学の本及び『心経』は「大禹謨」の十六文字によって始まるが、道心人心について西山は朱子の説が最も精確であるとする。即ち形気の私に生ずるか性命の正に原づくかで両者を区別する考え方である。形気の私とは声色臭味の欲であって、すべて気より発する。性命の正とは仁義礼智の理であって、すべて性に根ざしている(大学衍義二)。更に西山は言う、喜怒哀楽の理は性に根ざしている。だから気から言えば人心と言えるし、理から言えば道心とも言える。人欲の欲の字も単に欲とだけ言えばまだ善意に分かれない。七情も同様。善を欲し仁を欲すればすべて善である。耳目口鼻の欲もただ形気の私に過ぎないのであって、まだ悪とは言えない。天理と人欲と対比させて言えば、善悪がきっぱりと区別されるだけである。朱子の「形気之私」の四字は的を得て過不及がない。私とは公の反対であるから悪とならざるを得ない、と言う者がいるがそうではない。形気の私とは飢えて食らい、渇いて飲むようなもので、すべて自分の肉体の血気が欲するものである。よって私と言わざるを得ない。私とは私親私思と言ったたぐいである。けれどもこの欲は何人たりとも持っているもので、私と言えばよいが悪とは言えない。ただ私で公を滅すれば悪となるだけである(読書記、七)。こう考えた(10)。もともと一心なのであって道心人心の二つの心があるわけではない(11)。『大学衍義』で天理人倫の正しさや逸欲を戒めることを強調す

る西山の態度と合せて考えれば、この一心に厳しい倫理規範を求めるところに、朱子を受けた西山の心の功夫があったと考えられる。さて人心道心は已発時における謹しみ如何によってその安危が決する。即ち敬である。

朱子の功夫論では居敬と窮理とが相俟って人間の完成を目指す。構造としては敬が動静を貫き、窮理の基盤ともなるわけだが、彼が自らの学問と異学との相違点として力説したところは窮理であった。よって『大学或問』では、独り格物を窮理と釈した程子の説を採り、他の先儒の説を尽く退けて延々と格物致知を論じたのである。彼が考えた人心の本性は「渾然たる全体の中にして粲然として条ある」ものである。そこでこの衆理を具えた人心を明らかにするためには逐一の事理の窮明が不可欠のものとされたのである。西山は朱子の功夫論、居敬窮理を継承する。

「存心窮理の二者当に表裏功を用ふべし。蓋し窮理を知りて存心を知らざれば、則ち思慮紛擾し、物欲交々攻めて、此の心既に昏く且つ乱る。如何ぞ義理を窮め得ん。但存心を知りて窮理に務めざれば、能く執持静定すと雖も、亦た禅家の空寂の如きに過ぎざるのみ。故に必ず二者交〻進めば、則ち心正しからざる無くして理通ぜざる無し。学の大端唯だ此れのみ。」(西山文集三〇、問人之所以為学心与理而已)

ところが西山は窮理の方向には強く進まなかった。

「性は即ち理なり。而して是の理を主る者は心なり。其の心存すれば則ち其の理存す[12]。」(同二五、存斎記)

「涵養操存の熟すれば、心と理と一のみ」(大学衍義三五)

「此の心当に明鑑止水の如くすべくして、槁木死灰の如くすべからず。鑑明らか水止まれば、其の体静かなりと雖も、而れども以て物を鑑るべし。是れ静中に動を涵し、体中に用を蔵す。人心の妙正に是れ此くの如し。槁木の生ずべからず、死灰の然ゆべからざるが若き、是れ乃ち無用の物なり。人の心有る、衆理を具へて万事に応ずる所以の者なり。」(西山文集一八、経筵講義)

およそ体があって後用がある。人の一心も平居には湛然虚静、渾然たる一理で偏倚することなくして始めて、事物に応じた時に差錯することがない。もし静時に已に紛擾すれば、動時にどうして節に中ることができよう。周子の主静、程子の主敬、更に中庸の戒謹恐惧すべてこの意である(西山文集三〇、問体用二字)。では静時における渾然一理、明鏡止水の心が発動した時に必ず節に中るという確証はあるのか。格物致知によれば知識として理が明らかとなり、

少なくともその知られた理に関しては違うはずはない。しかし心の霊妙さにのみ任せて、衆理を具えているから必ず万事に応ずる、と簡単に言えるのか。そこで『大学衍義』では誠意正心で敬を説く。彼の言葉を聞いてみると、ここでは君主に対して言われたことであるが、天地の災異は我が身の放肆を戒めるものであるから、ここにおいて敬しむ。君主と人民との関係は心と身体が相俟つようなものであって、国にとって民は木における根と同じである。かつ民の心は天の意志に外ならない。民情の幾微がまだ著れない時に察して、我が身を敬まなければならない。民情の怨念は君主の非道によるものだからである。天下の万事はすべて我が一心に本づいているのだから、敬しめば事は立つ。事物に対処する場合も敬む（大学衍義二九）。以上すべて対象がある場合であるが、困難なのは独処。

「人の常情、祇だ群居に敬しむは易し。独処に兢畏するは難し。」（同）

所謂慎独であって、西山は「幽暗の中、細微の事、跡未だ形はれずと雖も、而れども己れ独り之を知る」という朱子の説を継承する。ここにおいて敬しまなければならない。

「蓋し不睹不聞の時にして戒懼する者は敬なり。己れ独り知る所、人未だ知らざる所の時にして慎みを致す者も亦た敬なり。静の時に敬せざる無きは即ち中を致す所以、動時に敬せざる無きは即ち和を致す所以なり。……静時には此を以て涵養し、動時には此を以て省察す。此を以て天理を存し、此を以て人欲を遏む。工夫到り極まる処、即ち所謂中を致し和を致し、自然に天地位し万物育す。」（大学衍義一一）

これも朱子の『中庸或問』を受けたものであるが、未発已発を通じて敬一途に突き進んでいく姿勢が見られよう。朱子の敬及び窮理の功夫の目的は心の本体を明らかにするにあった。西山の場合はその心が発した時に節に中って和を実現するにあった。朱子は格物致知を夢覚の関とし、誠意を善悪の関として、この二関を過ぎれば後の功夫は易いと言ったが（朱子語類一五）、彼にとっては、「知至って后意誠なるは、真に知り了るを須ちて方めて能く意を誠にす。……惟だ其の胸中了然として路径此くの如きを知り得、善の当に好むべく、悪の当に悪むべきを知りて、然る後自然に意誠ならざるを得ず、心正しからざるを得ず」（同）ということになり、真に知ることの一点に功夫は集約された。「大学補伝」で既に豁然貫通が説かれ、或問では敬が持ち出されて格物致知と共に窮極の功夫論が展開される。已発の省察も未発の本体を明らかにするためにあった。格物致知によって人の功夫は行き着くのである。しかし西山にお

いては「緊要全く此の両節（格物致知・誠意）に在」った。未発の中がいかに保たれ、粲然たる条理が整っても、已発時に省察を欠くことはできない。むしろ意の幾微を慎しむことこそ西山にとっての敬の功夫の眼目であった(13)。

さて敬の功夫によって養われる心の本体が仁に外ならない。宋儒がみた仁こそ全体大用に堪え得るものであった。仁は万物を育む仁愛の働きの本となると同時に、義礼智に分かれて働き出し、ここに仁愛の実現即ち大用が望まれるからである(14)。西山が黄勉斎を引いて言うところをみれば、仁を天の生意として捉えようとする姿勢がみえる(15)。

「天地の大徳を生と曰ふ。天地の徳たる所以、其の全体を語りて其の大用を極むれば、生と曰ふに過ぎざるのみ。生の外他道無きなり。天地是れを以て心と為す。故に其の仁を為す所以の者は愛是れなり。……蓋し適くとして生意に非ざる無きなり。其の静かなるに方りては、則ち一の生意以て四徳を包むに足れり。其の動くに及びては、則ち一の生意以て四端を貫くに足れり。則ち愛の理・心の徳、又豈二事有らんや。」（読書記、六）

この仁愛の実現のために重視されるのが孝である。孝とはもともと親子関係において言われるものであるが、その心と共に、冬温夏凊、昏定晨省といった具体的方法も尽くされていなければならない。全体大用の考え方である。この孝が親子に止まらず、すべての人間関係の基礎になってはたらき出すのである。

「天下の万善は同じく一源に出づ。愛敬の心随寓して見はる。之を親に施せば即ち孝と曰ひ、之を昆弟に施せば則ち友と曰ふ。其の実二道に非ず。曾子論ず、君に事へて不忠、友に交はりて不信ならば、皆以て孝に非ずと為す、と。蓋し孝者の心慈祥惻怛、之を君臣朋友に推して尽くさざる無き者なり。」（西山文集二六、孝友堂記）

すべて一つの愛敬の心の展開に過ぎず、孝が基本となる。父と子は天合、君と臣は義合というのが古来の儒教の原理となっていたわけだが(16)、西山によれば君臣関係も親子関係と同じく仁愛による結びつきであると考えられる。

「親に事へて孝ならば、則ち忠、君に移すべし（孝経の語）。蓋し孝とは忠の基なり。」（西山文集二四、忠孝祠記）

家と国という現実には性格の違う二つの極が一本化できることになる。君臣の名分はあくまで厳密でなくてはならない。しかし君主は愛敬の心で臣下に待する、これを礼という。臣下は誠実に君主に事える、これを忠という。義合せざれば去る、とは実は君主に敬畏の心を起こさせるという、君主を愛する心から出たことになる。やがて君主は臣下を賓客とし、友とし、臣下であることすら忘れて同胞相寄り従うことしか考えられなくなる。これは君臣共に仁愛

の立場に立っているからこそできることである(17)（大学衍義一〇）。当時対金政策に悩み、官民一致の国家的団結が必要であったろう時には、西山の忠孝の考え方は実際に大きな効力を発揮し得る可能性を持っていたはずである。また大学衍義は斉家に止まっているのであるが、このように見てくると家と国・天下は同じこと。家が斉うとは即ち治国・天平下の実現を意味する。

## 三

西山の心を重んじる傾向は彼が陸学と接触したことからも考えられる(18)。西山は楊慈湖に初めて見えた時、富貴利達の心を忘れてこそ道を語ることができる、と喩される（西山文集三五、慈湖先生行述）。では西山は慈湖をどうみたか。慈湖が「心思を泯し、持守を廃し、空妙を談じ、事為を略す」と議されたことに対して西山は、この四者がすべて備わっていると弁じ、「其の論を為すこと至って平実、空を談じ妙を説く者と同じからず。而して当世の務めに於て、討論区画、諸を掌に指すが若し。又事為を脱略する者に非ざるなり」と言う（同、慈湖訓語）。又、本心直心をもってするから空妙でないと説く。陸学の実の立場である(19)。しかし朱子に言わせれば、「楊敬中（慈湖）の輩の如きは持守し得て亦た好し。若し肯へて窮理し去かば、須らく窮め得て分明なるべし。然れども它肯へて読書せず、只一己の私見に任ずるのみ」（語類一二四）と。存養による本性の保持については認められるものの、窮理しないために現実には事物に対処できなくなる。又陳北溪によれば、「書を読まず、理を窮めず、専ら打坐の工夫を做すのみ。形体の運動知覚なる者を求めて以て妙訣となす。又聖人の言に仮託し、釈意に牽就して文を以て之を蓋ふ」（北溪全集四門一一、与陳寺丞師復一）と。朱子学の立場からすれば必ず事に即いて理を窮め、理によって事を成就するという、理気をはっきり分けた上で相即させる手つづきが必要である。こうであってこそ始めて聖門の実学と言える(20)。さて西山は言う。

「孩提の童も其の長を愛するを知らざる莫きなり。其の兄を敬ふを知らざる無し。此れ即ち良知なり。所謂本然の知なり。然れども此の良知有りと雖も、若し事物の上に就いて義理を推し求めて極至の処に到らざれば、亦た知り得尽くすに縁無し。且如ば親に事ふるに当に孝たるべしと知ると雖も、若し曾て孝の上に於て細細に推し求めざれ

ば、未だ末節細故を以て孝と為すを免れず。……大抵天下の理、推し得て一層の上又一層有り。」（西山文集一八、講筵進読手記）

これこそ陸学の非を突いたものである。孝ですら陸学はやがて自堕落に陥ってしまう。まして天下の事業となれば、どうしてその成就が望めようか。西山は朱子の窮理を捨て去ったのではない。慈湖の事為を略せずとは、立場に止まるものである。西山が慈湖より心の存養の点で受けるところがあったにしても陸学に満たなかったこと明らかであろう。

また西山には仏老を混えたという後世の批判がある。

「真西山は一代の大儒なり。其の大学衍義は深く天下万世に功有り。而れども建醮祈福し、仏に事へ仙に事ふるは又何の説ぞや。吾れ誠に之が解を為す能はず。」（困学録集粋五）

事実西山は仏老にも寛容な態度をとる。二氏に関する序文や跋文も少なくない。釈氏は必ずしも万法を空となすのではなく、また真実心地を本にして人倫を乱すものではないことを認めてもいる（西山文集二八、送高上人序）。老荘においても、百家の学も惟だ老氏だけが該ねるところが多く、その言は理に近い。清静慈倹は老氏の長ずるところであり、曹参や文帝はこれによって実際に功業をあげた。しかしながら、彼らが孔子の道を用いたならば、成功はより以上のものとなったであろう。老氏の無為無欲は万物の表に超然としており、荘周も千金の聘、三公の位に浼されることはなかった。後世の清談の弊や晋より梁に至るまでの乱亡は、すべて老荘を学んでこれを失した罪である。しかしながら、その本を推察すればまた老荘の罪と言わねばならない（大学衍義一三）。このように西山は言う。仏老でも認めるべきところは認める。ではその罪とは、

「儒者の存有り、老氏の存有り。儒者の存は吾の実理を存するなり。而るに老氏の説為る則ち曰く、綿綿として存するが若く、之を用ひて窮まらず、と。其の末流又所謂存想の法有り。則ち皆気を以て本と為して理を主とするに非ず。」（西山文集二五、存斎記）

儒学はあくまで天理による実学である。「天の物を生ずる、一の実に非ざる無し。理の人に存するも亦た一の実に非ざる無し」（大学衍義一三）。ここに於て儒と仏老とは厳然と区別される。根本的な立脚点の違いである。西山は儒釈

の弁においても朱子を受けているのであるが、そもそも全体大用の思想は、仏老の虚無の立場を含んでいるのである(21)。仏老は決して全面的に否定されるべきものではない。具体的な儒教倫理にのみしがみつくことは、逆に全体大用の広い立場を失うことにもなりかねない。西山の寛容な態度は全体大用の思想家にしてみれば自然なことだったのかも知れない。

## おわりに

以上西山思想の特徴をみてきたわけだが、彼が全体としての心を重んじるということが明らかになったと思う。朱子の全体は虚に加えて衆理を具えていることに意味があった。よってはたらき出した時にあらゆる現実問題を処理して大用が実現されるのである。朱子はそのために生涯義理の窮明に打ち込んだ。しかし西山の場合、虚にして衆理を具えた心の全体性をそのまま涵養する方向を執った。そうやって養われた心に更に発動時において省察を加えれば必ず節に中る、というのが彼の信じたところであったと思われる。これは居敬の立場である。では西山は大用の面に不充分なところがあったのであろうか。西山が地方に任官した時には、税金を軽くして外国船の入港を盛んにしたり、海賊の乱には自ら方略を授けて平定するなどの功績をあげた。又飢饉には荒政を講じ、倉廩を開いて配給したが、事を終えて帰る西山に対し、百姓数千人が見送りながら路傍の餓死者の墓を指差して、「公微かりせば、我輩已に相随ひて此に入らん」と言ったという(宋史本伝)。これらを見れば西山が仁愛に基づいた大用を実現させていたと考えることができよう。西山の心には朱子の理が具っていたのであり(22)、その実現方法として敬に傾いたのである。ならば朱子学内部でのゆれが生じたことは否定できないのであるが、決して朱子学の枠組みから外れたものではないと言える。また政治家としての西山は自分の学問(朱子学)を社会に実現させるために、自然に心学の持つ現実的、活動的な力にも頼る方向に傾いたことも想像に難くない。愛敬を強調するくだりに陸学との類似をみるのもそのためだろう。

〔注〕

(1) 彼が『大学衍義』を上進した端平元年（一二三四）には、朱子の高弟、黄勉斎や陳北溪は既に亡く、魏鶴山らと共に朱子学を支えている時であった。又、朱子が孔子廟に従祀され、正式に朱子学の公認が成るのは、後れて淳祐元年（一二四一）のことである。

(2) 四庫全書総目提要には「先づ其の治平に妨げ有る者を去りて以て治平の基と為す。故に大学の八条目、僅かに其の六を挙ぐるのみ。然れども古より帝王、本を正し源を澄ますの道、実に亦た此に外ならず」と言う。

(3) 以上のことについては既に楠本正継氏の「全体大用の思想」（『楠本正継先生中国哲学研究』所収）及び『宋明時代儒学思想の研究』に明らかにされており、参照されたい。以下も両書より多大の教えを受けている。

(4) 楠本前論文参照。

(5) 中とは理そのものではなく、「性の徳を状する所以」（大学或問）である。

(6) 「中と曰ひ、仁と曰ひ、誠と曰ふは皆道の全体、是の三者果たして一なるか。臣（西山）嘗て之を論ず、中なる者は其の天理の正を以てして偏倚する所無きなり。仁なる者は其の天理の公を以てして私欲に蔽はれざるなり。誠なる者は其の天理の実を以てして雑るに偽妄を以てせざるなり。従りて言う所の者同じからずと雖も、而れども其の道は一のみ。……中なれば則ち不誠無し。彼の高くして空虚に溺れ、卑くして功利に陥る者、焉くんぞ中有らん……」（大学衍義一三）とも言う。

(7) 楠本前書、伊川の部参照。

(8) 南軒の語、正しくは「為にする所無くして然る者」「為にする所有りて然る者」である（孟子講義序）。朱子はこれを「其の語意の深切、蓋し前賢未だ発せざる所の者」と絶賛した。

(9) 『近世漢籍叢刊三篇』「心経附注」の解題（荒木見悟氏）及び『王陽明全集』（明徳出版）第一巻の「語録」の解説（大西晴隆氏）参照。

(10) 陸象山の意見も認める。「陸子静云ふ、舜若し人欲を以て全く好からずと為さば、則ち須らく人をして之を去らしむべし。今只だ危と説くは、処りて安と為すべからざるのみ。精と言ふは其の精察して雑なる所と為さざらんことを欲するなり、と。此の言も亦是なり」（読書記三）

(11) 朱子も同じように言う。（朱子語類七八）

(12) 程朱も同じ発言をする。「涵養之を久しくすれば、自然に天理明らか」（二程全書一六）「人能く敬を存し得れば、則ち吾が心湛然、天理粲然、一分の力を着くる処無く、一分の力を着けざる処無し。」（朱子語類一二）ならば存養一途に進むこともできたはずである。楠本前書、伊川の部参照。

(13) 丘瓊山は『大学衍義補』において「審幾微」の目を特に補っているが、西山の『大学衍義』にこの点で欠けたところがあるというわけではなく、『大学衍義』の継承発展とみることができよう。

(14) 楠本前論文参照。

(15) 同参照。

(16) 『朱子学と陽明学』（島田虔次氏）第一章二参照。

(17) このような仁愛の立場は、張横渠の「西銘」を受け継ぐものであろう。

(18) 『道一篇』の著者程敏政は『心経』に注を附し、心学のもとに朱陸を合一しようとした。西山に已に朱陸異同論を導き出す要素があったことは否定できないであろう。楠本前論文、荒木前解題、大西前解説及び岡田武彦氏の「朱陸同異論と居敬説」（『中国思想における理想と現実』所収）参照。

(19) 楠本前書、象山の部参照。

(20) 同、北溪の部参照。又、『大学衍義』（一二）には『中庸』の「誠者物之終始……」において朱子の『中庸或問』の説を引くが、ここで朱子は誠を理の実と心の実の両面から説くのに対し、西山は心の実の面にしか解説を加えていない。こういうところにも心を重んじる傾向が表われていると言えるかも知れない。

(21) 楠本前論文参照。

(22) ただその具体的方法に朱子ほどの精緻さがあったかどうかは明らかにし得ないが。楠本前書、朱子の部参照。